

展望 自歌合

水辺あお

『自歌研究』2024年1月号「新春特別企画 新春自歌合大会」を面白く読んだ。

第1部は馬場あき子と吉川宏志の「『歌論』の真髓。よい歌とはなにか」と題した対談である。「西行・俊成・定家と現代歌人が、時代を超えて向き合う大問題」、「よい歌はどこからか。それはなぜか」の副題どおり、中世和歌の世界を担った歌人の歌とその評価について、現代短歌を最先端でリードする馬場あき子と吉川宏志が再評価しあっている。

歌は、西行が七十歳の総決算として自らの歌を二首ずつ三十六組選び、藤原俊成の判の『御裳漣河歌合』は伊勢神宮内宮へ、藤原定家の判の『宮河歌合』は伊勢神宮外宮へ奉納した。

西行より四歳年長の俊成は、「よしとはいかなるをいひ、悪しとはいづれを定むべしとは、我も人も知るところにあらざるもの也」と言いながらも、その判に真剣にとりくんだ。また二十代の若き定家も二年がかりで、大権威たる西行の歌の判をしあげた。

この俊成と定家の西行の歌へのそれぞれの

判のあり方も面白いし、これらの判に対する馬場氏と吉川氏の評価もまた面白い。

なかでも注目したのは、俊成が、西行の代表歌ともいえる「願はくは花のもとにて春死なむその二月の望月のころ」を、「来む世には心のうちにあらはさむ飽かやみぬる月の光を」と「持」（引き分け）にしたことだ。

馬場は「百人いたら百人が」、「願はくは」の歌の方がいいと思うでしょう。「来む世には」のほうは、「こんな歌つまらないよね。現代短歌として見たら」と述べ、「願はくは」の方を「勝」とすると思ったら「持」なんですすよね、と驚く。

吉川は、われわれは西行が歌の通りに二月に死んだことを知っていることも考慮すべきだと指摘した。そして馬場は、俊成としては「願はくは」「春死なむ」は麗しくない上に、「願いがあって、すぐ結論があるのはよくない」というのが俊成の歌論だろうと語る。これをうけて吉川は、俊成が「麗しくはないといいつつも『いみじく聞ゆるなり』（すばらしく聞こえる）」と言っており、それが俊成

のバランス感覚の良さだ」と述べている。

第2部では「現代歌人『ペア自歌合』豪華八組競選・判」と題し、馬場と吉川はじめ、八組十六名の現代歌人たちが、それぞれの同じテーマの自歌を二首提出し、相手の判をした。小島ゆかりは北山あさひとのペアで、「かたつむりの歌」二首の判を受けた。

かたつむりの殻右巻きに右巻きにわたしはねむくなるあなる

（『獅子座流星群』収録）

雨の日は雨のほひの 風の日ほひのほひの 聖かたつむり

（『雪麻呂』収録）

北川は二首目を勝ちとした。一首目には作者とかたつむりが一体となっていく感じがあって私は好きなのだが、北川は「聖かたつむり」にこそ真似できない熟練の技がある」とした。評価にはさまざまな角度からのアプローチがあるということが、勉強になった。いうまでもなく、歌を読み、かつ詠むことは、その歌人の歌論の実践であり、自らの歌論を磨く研鑽の場でもある。そしてあらゆる歌人の上に君臨する絶対的な歌論はなく、時代により、個性により違った歌論がある。そのことを目のあたりにする特集であった。